

翻刻 佐太神社蔵『わすれ貝』(竹内時安斎歌集)

芦田耕一

ここに紹介するのは、島根県八束郡鹿島町にある佐太神社所蔵『わすれ貝』である。鳥取県米子の唐物商人竹内時安斎が佐太神社に奉納したとされる自撰歌集である。

写本、全一冊。列帖装、縦二一・三糎、横一五・二糎。藍表紙で草木模様。本文料紙は鳥の子。表紙中央上部に題簽が貼付されていた跡はあるが、古くから剝離していたらしい(朝山皓氏「竹内時安斎に関する史料」勾玉二一七、昭十三年)。蔵書印はない。全四十四丁より成り、前に遊紙が一丁ある。一面は、本文は六〇八行、序は九行、跋は十二行である。和歌は一首二行書き、計百五十首。

題簽剝離や内題が無いので書名は明らかではないが、宮司朝山家蔵の、根岸吉平太署名の数々の書名が上がっている古文書の内に、「忘貝」がある(朝山、前掲書)。そして、序と跋に「わすれ貝」という語が見えており、これらによって『わすれ貝』とされている。

本歌集は、別筆と見られる「任愚見 合点畢」と花押があることにより、時安斎自詠歌を堂上歌人日野資茂に添削合点してもらったものをそのまま奉納したことが分かる。成立は貞享二年(一六八

五)、時安斎四十九歳である。資茂は後水尾天皇から古今伝授を受けた弘資男、従二位権中納言、貞享四年に没す。時安斎が、より有名な弘資(存命)ではなくて、資茂に批評を求めた理由は分からない。時安斎の自詠百番歌合である『うつせ貝』は藤谷為熙に点を乞うていることにより、資茂を専ら師と仰いで的行為ではないようである。本歌集は時安斎の和歌のみならず、資茂の添削を窺い得るに足る好箇の資料であり、ここに紹介するものである。

翻字凡例

一、翻字にあたっては、用字法・仮名遣いなど底本に忠実であることにとつとめた。但し、漢字の旧字や異体字は原則として通行のものに統一した。

一、底本の誤字や判読不能の場合は(ママ)や□とした。
一、各半丁の終りを、各巻から数えて、「1オ」、「1ウなどと示した。
一、末筆ながら、貴重な本集の閲覧を許していただき、翻刻をも快

諾していただいた佐太神社宮司朝山芳罔氏にはこの場を借りて深謝の意を表したい。

翻 字

自詠百五十首和歌二

御点をこひたてまつるこゝろをつつり侍し 自安上

しき島の 道のみちたる 時つ風 いたらぬ里も なよ竹の 世に
有わふる 憂身たに さしもかしこき くらゐ山 名たかく匂ふ

花のかほ 詠めもちかく ましはりを ゆるされ初し いくしみ

それたに有を 藻くつのみ かくてまよひの はれかたき 心を

さへに」1才 筆の海の 深きめくみに みちひかれ かへるたも

とは をのつから にしきたちきる 心地して 都のてふり かゝ

れりと ふるさと人に 昔しより かすならてしも さすか又 う

らやまれぬる 身と成ぬ それよりいとゝ あかなくの 世の思出

とをろかなる 心も身をも わすれ貝 くだけなからに ひろひ

つゝ 数かさなれば つゝむてふ 袖師の浦の あまの子に みの

しろ衣 うちきせて ならはぬ旅の みちしほも この枝折の

我跡を するへになして ゆきみよと 九かさねの」1ウ 雲かす

み わけて頼みを かけまくも あふく心の くらふ山 あかねさ

す日の ひかりもて てらさはそれも 玉津島 神のうけひく し

めなはの なかき世までの 名取川 しつみはてなむ むもれ木も

二たひ春に あふ瀬ならまし (四行分空白)」2才

立春

〳海山も風おさまりてけふはけにたつ事やすき春霞かな

早春霞

〳春のきてこやなて初る衣かといはくら山に霞たつなり」2ウ

春雪

〳けぬかうへに又もつもりてふる年の名残かさぬる春の初雪

子日松

〳むかしたれけふひき初てときはなる松にも春をしらせきぬらん」

3才

田若菜

里人はこそこのかり田の跡しめてをのかものとや若菜つむらん

山家鶯

やまさとの軒のつらゝも鶯の涙ときしる春はきにけり」3ウ

月前梅

むめの花こと〳〵わきて誰みよと色をくらふの山の月かけ

野若草

〳をそくとき秋の花野をむら消の雪まにみする春のわか草」4才

河辺柳

〳是も又たま藻とやみむ河の瀬になひく柳の波のしつえは

浦婦雁

〳別れけり声もまとをにあまの住うらのかすみの衣かりかね」4ウ

春駒

わか草につなかれてしかもかすむ野はひまゆくこまとみえかくれす

る

尋山花

あふ人はよし告すともさく花の山わけ衣香こそしるけれ」5オ
春心寄花

春は世の人のこゝろもほかならてはなになりゆくみよし野の山

花随風

はては又花もかくてそちらさしまつ香をとめてさそふ春風」5

ウ

夕落花

小初瀬やはな吹おろす山かせのにたくふもさひしともにさそへる晚鐘のこゑ

雉子

みかりせし冬野をいかにのかれきて春にあひぬと雉子鳴らん」6

オ

雲雀

暮ぬれはをのか芝生のとことにはあかるひはりの声そ落くる

水辺款冬

ゆく春もなかれてはやき宇治川のこゝをせにせよ山吹の花」6ウ

池藤

みるかうちの心はよそにうつろはてやるかたもなき池の藤浪

暮春

さためなき世のほかなれやけふ毎にかならず暮る春のならひは」

7オ

更衣

けふといへはたかならはしに夏衣花のたもとをおもひかへけむ

卯花

折人のこえぬはかりに卯花のまかきは雪の山とみえなん」7ウ

余花

消かての雪より花のをくれ来てみ山は夏(マヤ)を花さかりかな

新樹

花みしはにのみわかとみれは茂わかみとりりそふこのまの月もうとくとなり行」8

オ

山家郭公

庵しむる山のかひとて都人にさきたちてきくほとゝきす哉

晚郭公

しゐて待人のみきけと郭公あかつき月に音をもらすや鳴らん」8ウ

菖蒲

池水をひきわかれ行あやめ草さてたか軒のつまとなるらん

河五月雨

鈴鹿川八十瀬のほかはいくせともわかつてそわたる五月雨の比」9

オ

照榭(マヤ)

山とをみ鹿まつほとも夏の夜のそらたのめなるともししてけり

夏草

わけ過る人も夏野の草の葉は五にむすふとみはかりそ四しは朝な夕露の」9ウ

蚊遣火

夕されはけふりをそれと藁ふきのこやもあらはに蚊遣たくなり

池蓮

をく露を玉とみるよりのつからこれやたからの池の蓮葉」10オ

夕顔

やつれたる草のまかきをしら露をのか名のさすか花玉もてあかす〇夕かほの宿

納涼

へはな紅葉しらぬはかりのみかは風かよひならひかは夏もよそなる松のした風藤」10

ウ

六月祓

そらにみし影もとまらて水な月の名になかれたる御祓河かな

初秋風

明ぬ夜もすきまもとめて槇の戸のいたく身にしむ秋の初風」11オ

七夕雲

へたなはたのたもとゆたかに立雲はあふうれしさをさそつゝむらん

朝露

へ秋といへは思物ひねならぬ枕きたにおをいきてつる今朝のしみれは袖そ露けき」11ウ

夕菝

わひしきはなれしにまさる夕暮を秋となつけそおきの上風

雨後草花

へ花のひほとくいそけとや秋草につゆをきそへて過るむら雨」12オ

隣庭萩

はきのはなちらさぬはかり吹わけて中垣あらせ庭の秋かせ

戶外權

へあたし世をさしてしれとや朝顔の竹のあみ戸に咲かゝるらん」12

ウ

古郷蘭

藤はかまぬきとなるてふ白露のふるさとは猶いろそまされる

十五夜

へ藻塩やく煙をわけておし照やなにはかくれぬ秋の夜の月」13オ

閑路月

へこゆるともこえむ閑路の月かけにとゝむる駒のあしからの山

閑居月

身ひとつはよもたえしとや秋の月わか心をも空になすらん」13ウ

旅宿初雁

へしら雲の夕居る山に宿かれは枕をこゆる初かりのこゑ

野鶉

あれはつる野はふかくさにかくろひて床めつらにもなく鶉かな」

14オ

沢鳴

里とをみをか床とて居鳴のふしみの沢田暮渡るなり

野径虫

野をゆけは我袖ちかく鳴虫やくさのたもとゝおもひなれけん」14

ウ

浦搦衣

へ秋さむきあまのころもの浦風になみさへいとゝうちあかすなり

庭菊

へ長月の月のかけのみうつろひてさかりひさしき庭の白菊」15オ

霧中紅葉

へ小くら山名にたつ霧のたえまよりほのかにみゆる峰のみち葉

山家鹿

野辺はいま秋や暮ぬとさをしかのわかいる山の跡したふらん」15

ウ

暮秋

へとゝめえぬ涙をしらてなをさりの袖の露とや秋のゆくらむ

初冬時雨

秋はさは露なりけりと神無月けさふりわくる初時雨かな」16才

朝霜

へみしいろの木葉もさらにけさは又霜をく庭の面かはりせり

夕寒草

空にみつ霜の夕の下風にむすはぬ草もまつしほれぬる」16ウ

寒月

吹とちし夜はのうき雲風をいたみこほれる月の影そくたくる

池水半氷

へ一夜にはこほりもはてぬ山風に立てなかは浪よる広沢の池」17才

水鳥

へ置霜をいかにはらひて芦鴨のをのかあを羽は冬枯もせぬ

庭雪

くれ竹のいくよつもとかそへてもふかさしらるゝ庭の雪かな」

17ウ

松雪

またきより雪のふるえは下折ぬをのか千とせをまつとせしまに

橋上雪

明る夜の雲はとたえて白雪のつきてしふれる峰の棧」18才

鷹狩

へはし鷹をすゑ野の道のみえぬまていま一たひは狩くらさまし

神楽

霜八たひをきかさぬればふかき夜にはもさなから朝くらのこ

ゑ」18ウ

炉火

唐衣つまもかさぬさ夜とてもさむさわするゝ閨の埋火

炭竈烟

へ朝ことの民のけふりに立かへていかにさひしき炭かまの里」19才

年内梅

冬木よりかつさく梅の花ころもへすして春をみせけり

雪中歲暮

へ庭の雪に跡をのこさは行年のかたみはそれとみてもくらさむ」19ウ

ウ

初逢恋

へつもりぬる恨もなにか残らまし枕の塵を払ふ今夜は

後朝恋

へ今朝は又わか身ともなくあくかれてわかるゝ人にそふ心かな」20才

才

契別恋

へきぬくをまつなくさめて偽りに契るタも今朝はうれしきしらす又とたのめし

不逢恋

恨わひたえなはそれも世の人はあふにかへぬる身とや思はん」20ウ

ウ

逢夢恋

難面さをかこちもはてし逢と見るゆめのちきりも誰なさけかは

待空恋

明にけりさては今夜といはぬをもきゝまかひてや待わひぬらし」

21才

絶久恋

へいかにきてなからの橋のなからへてたえぬる人をこひ渡るらん

絶析恋

へいのるとも又あふ事はかたそぎの契りを神のしるへかなしき」21

ウ

被忘恋

人こそあれちかひし神のむくひをはいかにせんとて忘はてぬる

被厭恋

へせめて身よいとはれぬとも恋しねと人のこと葉のかゝらましか

は」22才

互恨恋

へ身にしらぬつらさをいかにかこつそとことほるも又恨ならずや

忍恨恋

へいかにせむ忍へはよふかき世かたりにそのつらさとて語る○を人のおもひしらす

は」22ウ

忍涙恋

へいまははやおさふる袖も朽はてゝ名さへもらさむ涙うらめし

隱名恋

へ頼みてもつるにもらさむ憂身とやとへと其名をこたへさるらん」

23才

欲顯恋

まつか根をきしうつ浪のかくてこそ世にあらはれむ中へそうき

寄花恋

へ吹風に身はなさねともみし人のこゝろの花そやかてうつるふ」23
ウ

寄月恋

へ物おもひわすれやするとみな月のうたてさそへる人の俤

寄山恋

へなかれても涙の川のおふ瀬なきいもせの山や我身なるらん」24才

寄海恋

へいせの海のみあまりにぬるゝ袂かなさても見るめはからぬ我身に

寄野恋

いつのまに秋立初て我かたを遠里小野の風すさふらん」24ウ

寄木述懐

岩木よといはるはかりの憂身もてなに人なみに世を嘆くらん

寄草述懐

しつめたゝ身をうき草のなかれても時にあふ瀬の末にあるかは」

25才

寄竹述懐

折かこふ竹のは山のかくれ家もなをおなし世にせはしかりけり

寄風懐旧

へ植し世をとほゝこたへよ古里にひとりとしふる庭の松風」25ウ

寄水懐旧

へくむ人の影こそみえね名はかりはむかしなからの山の井の水

寄夢無常

へむは玉の夢てふものゝなかりせはなにをこの世のたとへにはみ

ん」26才

釈教

へわすれめや子をおもふ道に声たてし鶴の林のしけきめくみを

神祇

へとても世をまもらは神も受やすきまことを人に道しるへせよ」26

ウ

寄都祝

よろつ代も散ぬ名におふ都かな君かこゝろの花にまかせて

寄松祝

へ君をまもる心はまつにあらはしてちよをそ見する住吉の神」27オ

四十のとしの春立日に

へよそにのみ聞つるものを老の波けふたつ春に身をそおとろく

時なかくなりて後すみなれし宿もあらぬさまにしつらへかへ

侍ける又のとしの春立日に

へ住わふる家路はこそにかはれるをたかしるへして春はきぬらん」

27ウ

同じ年の春門松の心を

このまゝの千代はたのまし松立るよもきか門の春も春かは

人のもとより梅をこひうけて庭にうつし植侍けるにとしふれ

とも花さかさりけるに

へ憂世かな花のあるしにならはやとうふれとさかぬ宿の梅かえ」28

オ

北野をうつしたてまつる社の前に梅のさかりなるを

へ里わかにほふにしろしむめか香よろしく候のよもにあまみつ神の春風

梅を手折て物よりかへりまうてくる道にて人の花をこひけれ

は

へあかく猶すたをりそかへる山さくらまた見ぬ人のためはかりかは」

28ウ

父かか所にまかりけるに花のちるを

へ根にかへる花のにほひのたよりにてこけのしたにも春や知らん

つゝしの花咲ける川きしに藤のさかりにみえければ

へむらさきのあけやむはふと岩めつらしく候つゝし花のうへこすはなの藤波

此さとはは郭公もまれにて聞知る」29オ人もなかりけると人

の申けるついでに

へあはれ知人もなしとやほとゝきす雲井のよそにねをおしむらん

母にをくれて後なれし衣を見て

へうつ蟬のむなしきからをこのもとのかたみとみるもねはなかれけ

る

おなし比 撫子を

へ今よりは身をなてしこの花そとも」29ウたれかは露のめくみかけ

まし

庭に草木をうへてほとなく身まかりける人の跡をとふらひて

へこの世より涼しきみちをもとむとて草木を庭の面なれにけん

母の愁にてこもれる比 七夕

へ天の川としに一夜のあふ瀬尤候たになかきわかれの身にそうらやむ」

30オ

相すみける女みまかりける秋の比女郎花をみて

へつねならぬ世はあたし野のをみなへしむすふちきりも露のまにし

て

八月十五夜家にて月みむとかねて人くいひかはし侍れと
雨ふりにければとふ人もなくて独おもひつゝける」30ウ

へこゝろみに今夜の月のくもるらんめつらしく候さらは名をたに人やわすると
同しく十六夜月あきらかにおもしろかりければちぎりし人の
許へ申つかはしける

へいさよひやいさともいひて我やとのきのふの名残とへかし
京にのほりしころ金蓮寺にて」31才ある房のもとにやとりけ
るにあるしの僧秋はかならずくたりてみつからかもとにとは
んなといひけれとをきさかひなればさもあらしとおもふに
そのことの末かはらて八月はかりにをとつれ侍ければ

へむすひをくちきりかはらて草の戸の露に雲井の月そやとれる」31
ウ

かの僧京にのほるとて九月十日あまりの比おもひ立けるかそ
の夜はちかき山里にやとり侍るよしを聞て跡をしたひ行旅宿
月といふ心を

へおもはずよ都の月をよそにしていなはの雲のうへにみむとは

玉たれ山といふ山寺にて月を見て」32才

へそれと見むころもにかくる玉簾の外山をいっにすめる秋の夜の月
なか月の末つかた山さとにわきていろことなる紅葉の一もと
みえ侍けるを友をゐてゆきけるにかしこにてはさもみえさり
ければ

へたつ田姫人のをるにはまかせしと山のにしきをたちかくしけん」
32ウ

神な月風にこの葉のちれる比大山にのほりけるにこの所はそ

のかみ仙境にて侍るよし人のいひければ

へやま人のたちぬはてきし衣かと峰のあらしに散木葉かな

いつもの国にすめるある僧のいまた知人ならさるか許より山
家雪といふ心を読んでつかはしける返しに」33才

みればはや跡したはれてあつめつるこゝろもしるき雪の山窓

ある人のもとにて八景の歌とてよみけるうちに 大山暮雪

へをのつからあつめぬ窓に夕はへのひかりををくる雪の遠山

万日の念佛をすしける山寺にとしの暮にまうて」33ウ

へ法のごゑ鐘のをとにもおとろかてことしも夢と暮しけるかな

寄歳暮述懐の心を

へ藻くつのみかくてつもれるとしなみをわか身のうらと袖しほるな
り

相すみける女にをくれし又のとしの春むすめみまかりけるに

ある人とふらひて かなしきはかへらぬ人の」34才残しをく

わすれかたみも跡をしたひてとよみける返しに

へこそのおもひことしのなけきこりつめてこかれこかるゝ身のを哀し
れ

同し比子をうしなひてなけく人のもとへつかはしける

へ身をすれば涙くらへぬさきにたによその哀をくむたもとかな」34
ウ

父ある友をかたらひて両吟のはいかい連歌を千句つゝるへき

よしいひかはしてすてに八百韻あまりつらぬけるか俄に病に

ふして其心さしもはたさてみまかりける後彼筆の跡をみて

へおもふ事いはてやみぬと水くきのかすは千々にもたらちねの跡」

35才

同しく遠きをおふのわさをいとなみ侍けるに我さへとしの老
ければ

へ老ぬれば跡とふまてのとし月もいまいくほとのかたみならまし

母の一めぐりのわさに

へ月日のみこそそのけふにしかへれともいやとをさかる別かなしき

人にをくれて七日にあたりける日」35ウそのはか所にまかり
て

へ猶なかきわかれとそなるけふは、やむつのちまたも過る日数に

憂世の事につけてさしこもり居けるを人くくとふらひて物か
たりするついでに

へなくさめとはる、かひもなかりけりうき身にいとふうき世かた
りは

同じ比あるかたよりみつからを」36才とふらふ心とて 冬は

雪秋はむくらに戸さすてふかならず罪を身にはしらぬと、侍
るよしを人の伝へきかせ侍ければ返しに心に

へ我門はさらてもとつる葎生のなをうき世とて冬籠りせり

とし比の友いつもの国へ住所をかへてまかりけるにつかはし
ける」36ウ

へことの葉の道をゆき、のたよりにていつも八重垣中はへたてし

よみける歌の巻があるかたより見せよとありしにつかはしけ
るに又こと人にもみせ侍るよしをいひてかへしければ申をく
りける

へかきつめて我さへくゆる藻くつ火をいかにやもらす和歌のうら

風」37才

醍醐よりおきの国へさすらへておはしける僧の許へつかはし
ける

へこ、にきく袖さへぬれぬ和田の原八十しまかけし波の哀に

おなし人のもとへよみける歌のよしあしをとひにつかはしけ
れば巻の奥、和歌の浦のわかたくひそと友千鳥なくねに人の
うき名もらすなと」37ウかきつけてをこせける返しに

へわかの浦のたくひと君かいさなへるあとさへわかつてなく千鳥かな
ある人はしめて歌よみける所にて

へみか、てはかゝるひかりの玉さかによるありともきかぬ和歌のうら浪
あひかたらふ友のもとへまかりければある人よめるとて玉

は、きの歌を」38才見せけるをみてそのよみ人のもとへつた
へよとてよみをき侍し

へかく跡を見てそ知らるゝ玉は、き手にもてなれし松の言葉

母をとゝめて京にのほりし友のもとへたより、つけて申つか
はしける

へ雲井より国の名におふは、き、のありかもさそな恋しかるらん」

38ウ

京より下りし人のひさしく田舎わたらひしてのほるに名残を
したひ一夜のやとりまでをくり行あしたにわかるとて

へそのまゝにわかれもやらすをくり来て二たひしほる我たもとな
京にのほりし比ねんころに物いひける人のもとへ都の恋しさ
につけて」39才田舎にはなをありわひけるよしをいひつかは
す文のおくに

〓恋しさにをくるこゝろを宮こ人とゝめて身にはかへさすもかな
〓消ぬまの身をうき雲のさらはなとみやこの山にかゝらさるらん

つねに琴をもてあそぶ人の宿に松をうへ侍けるを見て申」 39
ウつかはしける

〓山松のあらしも軒のつまことのねにかよへとや君か植けん

耕牛無宿食蔵鼠有余糧万事分正定人間何曾忙といふ古詩の心
を

〓市人のうるてふ事もうしなふもさたまれる世に立なさはきそ」 40
オ

□消是非といふこゝろを

〓難波江のよしあしともに枯るよりさらにさはりも浪の月かけ^{上の}

六十一のとのしの賀とて祝ひける人のもとへ申をくりける

〓ことしより又こはむとやふみ初ぬ六十のゝちの老の一坂

世のおほえなくなつて俄に」 40ウいなはの国へめされ身をた
てつかふる人によるこひ申とてよみ侍し

〓君は今いなはの山の名にたかきまつにかひある世にそさか行

秋の祝のこゝろを

〓たのしさに千代よはふなり御調物はこふいなはの山とよむまで」

41オ

春の祝の心を

〓わか君の道ひろき代の春風に雪もときしるむさし野の原 (五行

分空白)」 41ウ

任愚見 合点筆 〓」 42オ

(42ウは全面空白)

此一冊は貞享元年^{甲子}やつかれ京にのほりし比 日野中納言資茂公に
まみえ奉り自詠五十首和歌に御点を得て下りし又のとのしの春此巻を
したゝめて又御点乞奉るにあこ^{重蔵十五歳}のわらはなるをのほせ侍りける
にその折しもおほやけ事に御いとまおはしまさぬ比にて御点は調さ
りけれども巻を御とゝめをかせたまふによりいとたのもしくおも
ひて其後便りに御家人西野将監殿まで文つかはすとて 藻屑にもふ
たゝひ和歌のうら浪のあはれかくへき恵みともかな いたつらに玉
もひろはて海士の子のかへるは和歌のうらみ也けり とかきつけて
ついてよろしくおはしまさは披露もし給ひてんやと申送りけれども
さらに返り事もなくて」 43オこは本いとをらぬ事よとおもひ絶侍け
るに同しく三年十一月中の七日に出雲国池原氏なにかしの御かたよ
り京都より伝へきたれるよしにて此巻もたせつかはせしをいそぎひ
らき見るに御点あはせ下したまひぬ年ころのねかひ此一時にひらけ
る心地して身にあまり有かたくおもほえ侍ぬその比此道の友とてか
たらふ人よろこひにとてまうてきて歌よめるついでによみ侍る
わすれ貝かひあるあまのすさひかなひろへは玉の光ましへて」 43
ウ